

# 仏典を読む (七)

## 「空即是色」

芝原 茂

お経を口で読んだことはあるが、心で読んだことはついでない。いま、仏典を読み、と命ぜられて、常日頃数学で学生達をいじめているその仇を、仏典でとられようというのか、それとも、いままで私には得られなかった仏縁を結んでやろうという編集委員の親心なのだろうか、等々の勘繰りが思わす頭を過る。ともあれ、『般若心経』を読もう。というのは、僅か二七六文字程度の『心経』は大乗仏教

思想のエッセンスである、と言われていることや、「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」とリズミカルに読誦されることに快よさを覚えることなどもさることながら、「空即是色」という言葉に以前から興味を寄せていたからである。

現代数学を支配する思想は公理主義である。ユークリッドの『幾何原論』の記述は、全く自明と思われる若干の命題（公理と呼ばれる）からすべての命題を導くというギリシャ幾何学の思想に基づいて、概念の定義と、若干の公理から始められていた。ところが、十九世紀になって、ユークリッド幾何学の「平行線公理」と矛盾する命題を公理として持ついわゆる非ユークリッド幾何学が展開された。このことが契機となって、数学者達は公理の性格について反省する機会を与えられたのである。その結果、数学における公理は、自明の命題という意味を失い、一つの理論の前提となる根本命題を意味するに過ぎないものとなった。一方、概念を定義する為には別の概念を用いねばならないが、これでは如何にしてもその意味を明確に出来ない概念が残ってしまう。そこで、むしろ基礎概念は無定義で導入する、即ち基礎概念は個別的には定義せず、若干の公理でそれら無定義概念の間の関係を述べ、そのことによってそれらを間接的に定義する。基礎概念を無定義で導入し、それらの間の関係を規定する命題を公理として掲げ、この若干個の

公理からなる公理系を前提として、そこから理論を展開しようという思想を公理主義という。

公理主義を提唱したのはヒルバートであった。彼は、公理主義に基づいてユークリッド幾何学を再構成している。

彼の幾何学では、「点」「直線」「平面」の三つが相互の関係を規定する公理においてのみ述べられていて、「点」とは何であるか直接には定義されていない。従って、公理を満足するものでさえあれば、たとえ我々が直観的に理解している「点」と相違していても、また、通常考えられている数学の対象でなくても、その具体的対象を「点」と名付けてもよい。即ち「点」と名付けられる具体的対象は種々あり得るわけで、「点」自体は具体的な意味内容を有しない。いわば空虚な概念である。「直線」「平面」も同様であるから、この三つを用いて定義されている諸概念も悉く空虚なものである。具体的な意味内容を有しないから空虚だと言ったが、空虚であるからこそ、多様の具体的対象にその名称を与えることができる。

かくの如く、公理論的数学の諸概念は具体的意味内容を有せぬ空虚なもの。しかし、具体的意味を持たぬが故に多様の具体物に顕現する。逆に、具体的な対象の性質が統合され抽象化されて、公理論的数学体系は構成されるとも言えよう。具体的対象と抽象的概念との関係は、色と空との関係の数学的様相だと言えないだろうか。

かつて、私が公理的数学を初体験した時、どうにも理解できなくてこずった。が、結局、頭の中から一切の既成の知識を捨て、空っぽのところへ無定義概念と公理系を受け入れることで飛躍を遂げることができたのであった。

『心経』を読もうと志して、あれこれ解説書の類を読みあさった。自国語の、しかも現代文であるのに、くやしうかな、よく理解できない。むしろ江戸初期の盤珪の『心経鈔』が理解できないながら心に響く。一休は『般若心経解』の中で「詞にあらはし文字に書きうつしたるを、心経といふにあらず。此の経は則ち自心をさしていふなり。文字に書きたるは文字般若なり。自心をはなれて外に文字にて書きたる経をもとめなば、是れ則ち愚癡の心なり。はんにやの智慧にそむくなり。」と説いている。『心経』に限らず仏典は目で読むものではなく体で読むものであろうか。体を空っぽにして、小ざかしい、知者のふるまいをせずして、吸収すべきものであろうか。頭も体も全く空にすることは、分別くさい凡夫の私にはなかなか困難なようである。

(しばはらしげ 文学部教授)

